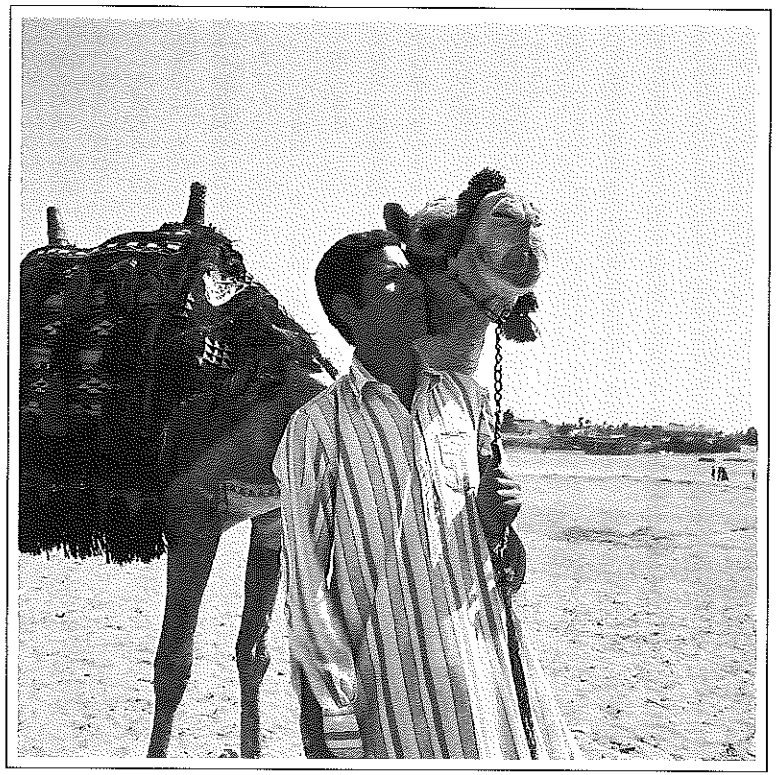

特集　大災害と文明の転換

記憶と人をつなぎ続ける難しさ
――かつての被災地の事例から

三木　英（みき　ひずる）

一．はじめに

被災地で宗教に何ができるのか。東日本大震災以降、多くの人がこのことについて考えてきたに違いない。この問いは人々が、そして社会が大きなダメージを被った危機的状況下で発せられるのだろう。阪神淡路大震災のケースでもそうであった。宗教関係者・宗教研究者はかつて経験したことのない状況に直面し、「何ができるのか」という問いへの解を求めて被災地を歩いたのである。

筆者もかつて、阪神淡路大震災の被災地において、この問題を念頭に置いてフィールド・ワークを行った。[1] そこから見えてきたものを、以下に整理しておこう。第一は被災地の寺院や神社といった伝統的な宗教施設はそれ自体がダメージを被ったがゆえに、被災者に救援の手を差し伸べる余裕を持ちえなかったということである。第二に、被災直後から伝統教団や新宗教教団は被災地入りして救援活動に邁進した――メディアでその模様が報じられることは（とくに新宗教に関しては）ほぼなかったが――ということがあげられる。この第二に関連し、諸教団はそれぞれが独自に救援活動を展開し、教団の枠を超えた宗教界全体による取り組みにおいて希薄であったということも第三に指摘しておかねばならない。東日本大震災後の被災地では、この過去を教訓として教団間をつなぐネットワークが形成され、そこに拠って救援活動

が行われていたことは評価できることである。そして第四には、それら教団の動きとは別に、被災者自らが復興への歩みのなか昔ながらの祭りを被災以前にも増して盛大に催していたことがある。彼らは関西の夏祭りとして馴染み深い地蔵盆や、地車（だんじり）祭りを敢えて執行し、被災した人と地域を元気づけようとしていたのである。そして第五として、被災者が――おそらくは「宗教」という言葉を意識することなく――自らの手で宗教儀礼を創出した、ということをあげておこう。被災者を追悼するため、震災の記憶を後世に伝えるために被災各地に建立された震災モニュメントを経巡る行事、すなわち巡礼が発明されていたのである。

ここでは、教団による被災者救援の取り組みについての議論は他稿に委ね、第四と第五の論点に照準を合わせての考察を展開してゆく。教団宗教に着目するのではなく、一般生活者が主体となって信じ実践する宗教、すなわち民俗宗教レベルにおける実践の、震災直後と現在の姿との比較を試みてゆく。祭りや巡礼はいまも変わらず、行われているのだろうか。もし変化があるとするなら、その変化は一体何に因るのであろうか、それを考察しようというのである。

まず、筆者が見て取った被災後数年の被災地における祭りと巡礼について、確認しておくことから始めよう。その後に、それらの現状を報告する。

二　被災地の祭りと巡礼

阪神淡路大震災被災地の神戸市東灘区、ＪＲ住吉駅の南西すぐに本住吉神社がある。この神社では毎年五月三日・四日に通称・地車祭りが行われ、地元住民が多数参加して賑わいを見せる。この祭りは震災当年の一九九五年は中止を余儀なくされたものの、翌九六年には氏子たちの尽力により開催された。また一九九八年には、祭りと地域を盛り上げるため、地車と地域を愛する人であれば――氏子であるか否かを問わず――誰でも受け入れることを方針として定め、祭りの運営方式を一新している。すなわち住吉地車振興会を結成し、各地区が持ち回りで祭りを主導するという以前のスタイルを廃して、振興会が祭りの執行を一元的に統括するようになったという

ことである。そこには、「傷ついた地域社会を元気づける」という意図が確かにあった。この年に女性だけが担ぐ「ギャル神輿」を登場させているのは、祭事から女性を排除する伝統的発想をあらためることで、一層に地域の一体性をアピールしようとしてのことであろう。さらに二〇〇〇年には、東灘区に存在する地車が結集して区内を巡行するという催しが初めて行われるに至った。東灘区内の御影・住吉・本山・本庄・魚崎の各地区に所在する神社の約三〇基の地車が集まり、「東灘区制五十周年記念だんじりパレード」が開催されたのである。被災地・東灘の住民は、この祭り（パレード）を通して、「我が街」への思いを新たにしたことであろう。

この東灘区の西方に神戸市長田区はある。古い木造住宅が並んでいた長田区は元来、地蔵盆の盛んであった地域であるが、この夏の祭りは震災当年にも執り行われた。地震直後に発生した大火が家屋を焼き尽くし、その結果に更地があちこちに現れることになったこの地区には、街角に、また都市計画によって建築された高層の市営住宅の階段踊り場にも、多数の地蔵が祭祀されている。地蔵盆が近づくと祠の傍らにはテントが設営され、その下に椅子と机が並べられて、そこが住民たちの談笑の場となる。また子どもの健やかな成長を願う親たちが我が子の名前を墨書した提灯を奉納し、それが数多く吊り下げられる。祠の前、左右は菓子や飲料等の供え物でいっぱいである。供え物の「おさがり」をいただくため、八月二三日の夕刻から地蔵前に行列する子供たちの笑顔がまぶしい。テントの下で、あるいは街角で談笑し、また震災時の恐怖を語り合う人々の姿もあちこちに見える。この祭りも、「こんなときだからこそ」と、敢えて開催されていたものである。住んでいた住居が倒壊、あるいは焼失して郊外の仮設住宅に移らざるをえなくなった住民たちも、この日ばかりは住み慣れた街に戻って来ていた。地域の住民が皆で犠牲者を偲び、無事を確かめ合い、生き続ける力を与え合う機会を、この夏祭りは提供していたといえる。

祭りとは「社会集団のメンバーが周期的に集合し、聖なるシンボルをめぐる非日常的な手続きに即して、日常生活で希薄になった共同性の感覚（「我々」）が同じ仲間